

特集

すげーすげー!

大崎

私たちが住むこの大崎町は、多くの人から『リサイクルのまち』として知られています。缶・ビン・ペットボトル・紙・プラスチックなど27品目の分別を行っていて、環境省が実施している一般廃棄物処理実態調査で80%を超えるリサイクル率を達成し、9年連続で日本一となっています。今の子どもたちにとっては『生まれた時から当たり前』という感覚だと思っています。私たちも普段から聞いているので慣れていますが、実はこれってすごいことで、言わば『日本一地球に優しいまち』ということではないでしょうか?その一方で『分別が大変』『面倒くさい』なんて声を聞くこともあります。今回は、大崎町民が一丸となって取り組んでいる『リサイクル』とは何なのか?きっかけや成果など、知ってほしいと知らない町の取り組みについて東町長と町衛生自治会会長の中村幸一さんに聞いてみました。

分別が始まったきっかけってなんでしょう?

東 本町には昔から焼却炉がなく、全てのごみを混ぜたまま袋に入れて回収し、市町村合併前の志布志町・有明町・大



▲曾於南部厚生事務組合清掃センター

崎町の3町（現在は志布志市・大崎町の1市1町）で構成される曾於南部厚生事務組合清掃センター（志布志市有明町野神）へ埋め立て処分していました。以前は別の場所に埋め立て処分場があったのですが、そこが満杯になったため、現在の場所に平成2年に建設され、現在も使用しています。

そういえば小さい頃、真っ黒なごみ袋に何でも入れてごみステーションに持って行った記憶がありますね。

中村 確かに昔はそうでしたね。生ごみなど腐るものも一緒に入っていたので、ごみステーションはカラスが来た

り、悪臭がしたりと不衛生な状態でした。生ごみをあさりに動物が寄ってくるので、どこのごみステーションにも金網タイプのゴミ籠が置いてありましたね。

東 各自治会のごみステーションでもそのような状況だった

ので、ごみが運ばれてくる埋め立て処分場の建設にあたっては反対も多くありました。当時の関係者の努力によって、なんとか地元住民の理解を得ることができ、平成2

年から16年までの15年間で満杯になる計画で建設されたのですが、埋め立て開始当初からごみが増え続け、埋め立て

処分量が予想を上回り、計画期間の平成16年まで残りの年数が持たないという恐れが出てきました。

地元住民に理解していただけてやっと作った処分場なのに大変なことになりましたね。

東 その通りですね。当時の3町の首長以下担当者は日々増えていく埋め立て処分場の状況に危機感を募らせながら対応策を協議しました。そこで出された対応策は3点。まず1点目は焼却炉の建設です。

これについては、多額の建設費と維持費がかかると見込まれ、財政的に困難と判断され

ました。次に2点目は新たな埋め立て処分場の建設です。これについては、既存の埋め立て処分場を建設したときの経験から、新たな候補地となる場所の周辺住民からの反対が予想されることから困難と判断されました。1点目、2点目の対応策が困難と判断され、最後に残ったのは現在も続いている徹底した分別による埋め立て処分場の延命化でした。

『分別』することが目的ではなく、『埋め立て処分場の延命化』が目的だったんですね。

東 目的はあくまで『埋め立て処分場の延命化』であって

INTERVIEW



中村 幸一 (64)
平成23年から大崎町衛生自治会会長を務める。西平良・平良上・中沖西・中沖南の民生委員としても精力的に活動中。

INTERVIEW



東 靖弘 (72)
平成13年から町長を務め現在4期目。助役時代からごみ分別・リサイクルの取り組みに携わる。